

### 3. 油症児の歯科学的検討

長崎大学医学部附属病院

第一歯科口腔外科

伊藤 輝雄 前川 尚之

水摩 敏雄 小林 保

玉之浦地区における小・中学生の歯牙形成状態について

#### <緒言>

我々は、いわゆる油症患者について、歯科学的見地から歯牙および口腔内所見についての追跡調査を続けている。

本年度は、パントモグラフィーX線撮影装置を使用し、歯牙の形成状態について臨床的観察を行ない、我々が昭和47年度に行なった調査結果との比較検討をし、油症の歯科学的見地からみた経時の変化について検討を加えた。

#### <調査対象>

いずれも長崎県五島玉之浦地区の6才から14才までの小・中学生、男子88名、女子82名、計170名で、その内訳は認定児57名、未認定児48名、対象として同地区の健康児65名であり、その年齢別内訳は表1に示すごとくである。

#### <調査方法>

昭和53年6月同地区において撮影した児童、生徒のパントモグラフィーX線像所見をもとに、各歯牙の歯牙長を計測し、上条の研究を参考に日本人永久歯の各平均完成歯牙長を10点とし、各年齢の各歯牙について歯牙の形成度を算出、各々、認定児、未認定児、健康児について比較検討を行なった。

なお計測に関しては、レントゲンのに不明瞭な点もあったが、可及的に正確を期し、全例、Blind control trial によって最終的に判定した。

#### <調査結果及び考案>

我々は、昭和47年度に油症児を中心にパントモグラフィーX線撮影を行い、そのX線像から、油症認定児は、健康児に比べ歯牙の形成が遅れる傾向にあることを窺わせる所見を得た。しかし、これがPCBによるものか、また、それが、一時的なものか、永続的なものかは不明であった。

そこで、我々は油症発生10年後の油症認定児、未認定児、健康児について歯牙形成状態を観察しPCBによる慢性的な影響について検討を試みた。(図1~9)

その結果、現時点においては、歯牙形成状態について、油症認定児、未認定児、健康児間に有意の差は認められなかった。

一般に、小児の成長、発育に関して、栄養失調、疾病等による一過性の成長発育障害では一時的に成長が抑制されても、その回復期には“catch-up(追いつき)”現象または代償性の成長が通常の成長速度より著しく認められ、しだいに本来の個体の成長曲線にもどろうとすることが知られている。歯牙も身体の成長発育とはきわめて密接な関係をもつことから、一時的な形成障害因子により形成速

度の低下が認められても、しだいに本来の形成度にもどることも、当然考えられることである。

今回の我々の調査結果はそのことを窺わせるものであったが、今回は一回のみの追跡調査であり、対象児が成長期であるという年令的特殊性や地域性、環境風土なども考慮しなければならず、今後とも注意深い経過観察が必要と思われる。

<結 語>

今回、我々は昭和53年6月、長崎県五島玉の浦地区の小・中学生の歯牙形成状態を調査し、油症認定児、健康児について比較検討を行なったが、現時点において差違は認められなかった。

表1 年齢別調査対象

	認定児	未認定児	健康児	計
6歳	2名	5名	5名	12名
7歳	3	2	5	10
8歳	4	1	7	12
9歳	3	4	5	12
10歳	8	7	7	22
11歳	6	2	7	15
12歳	8	10	11	29
13歳	8	6	8	22
14歳	15	11	10	36
計	57	48	65	170

図1 歯牙の形成度(6歳)

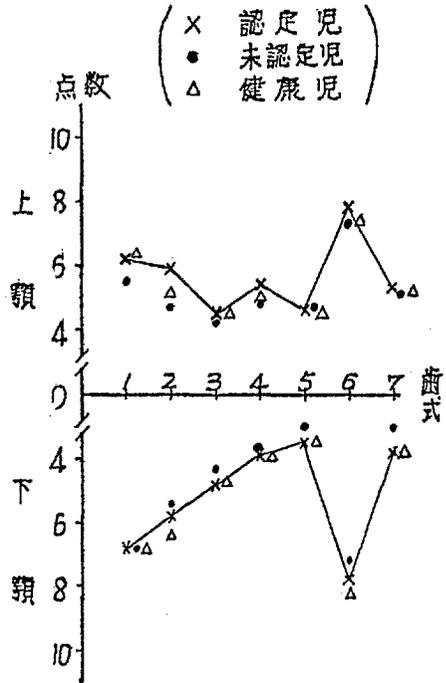


図2 歯牙の形成度(7歳)

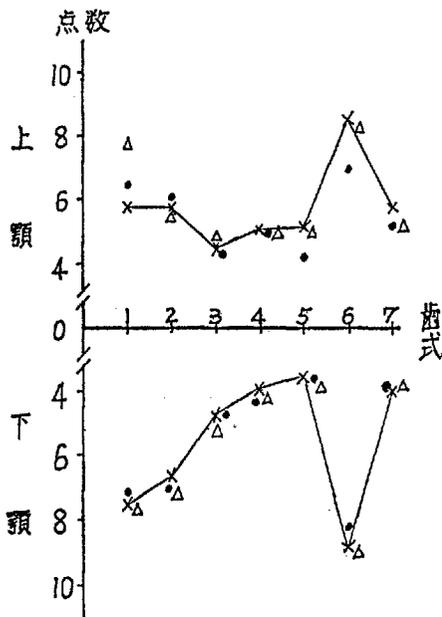


図3 歯牙の形成度(8歳)

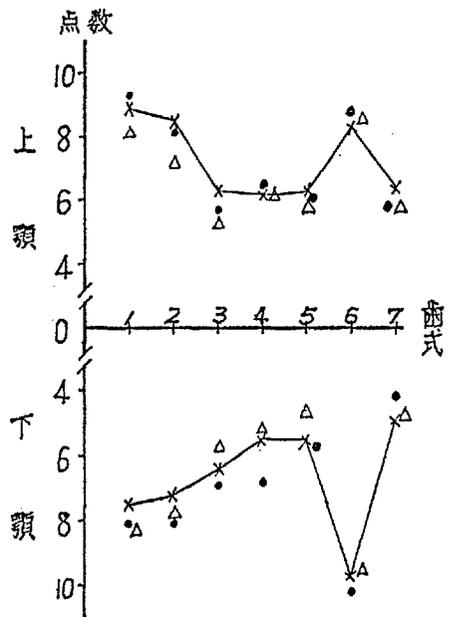


図4 歯牙の形成度(9歳)

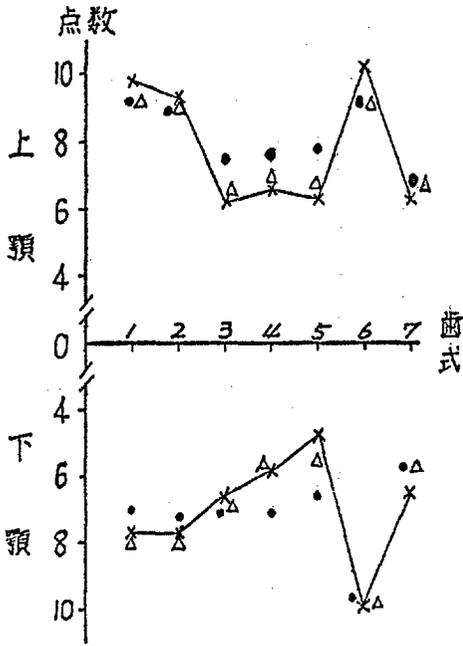


図5 歯牙の形成度(10歳)

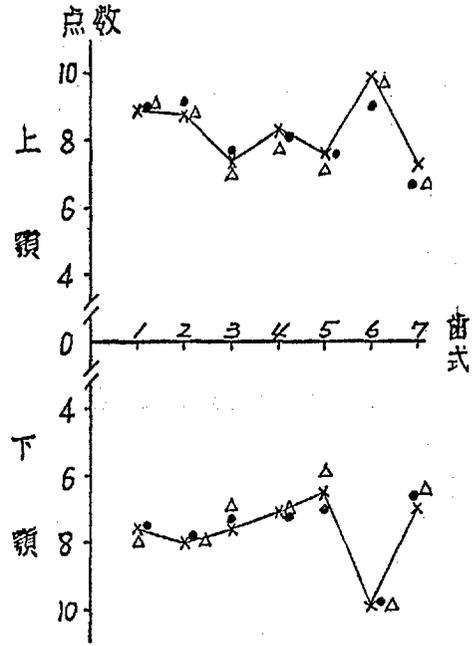


図6 歯牙の形成度(11歳)

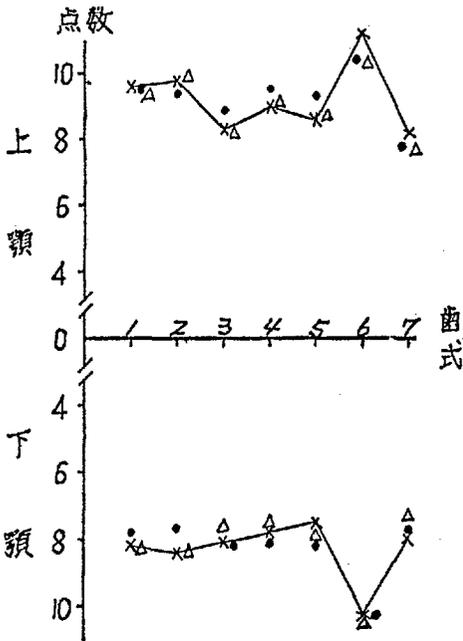


図7 歯牙の形成度(12歳)

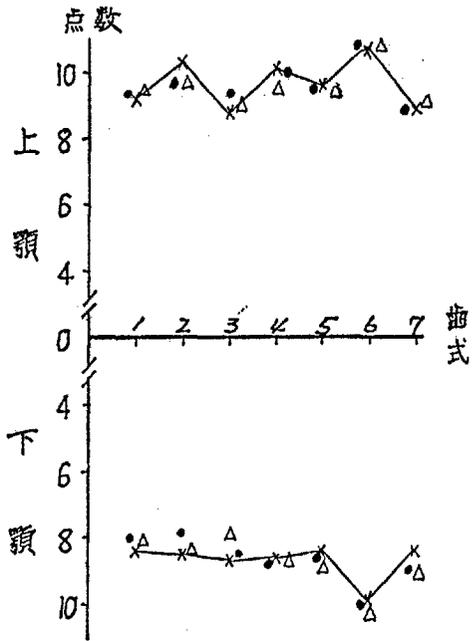


図8 歯牙の形成度(13歳)

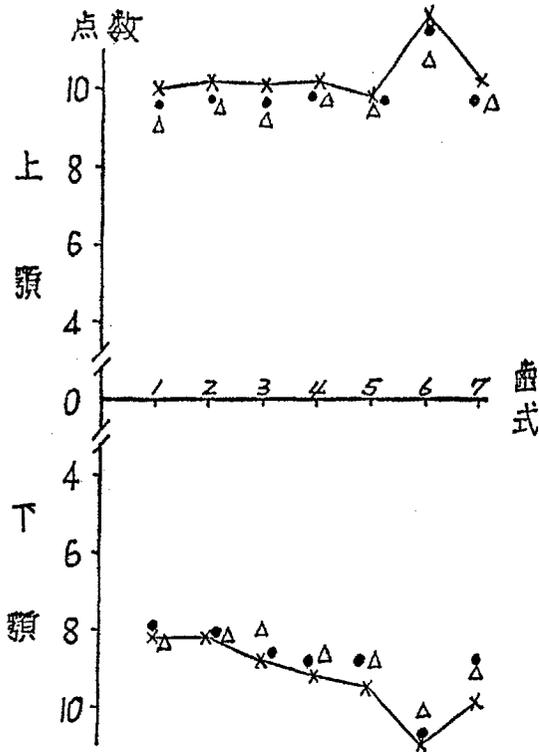
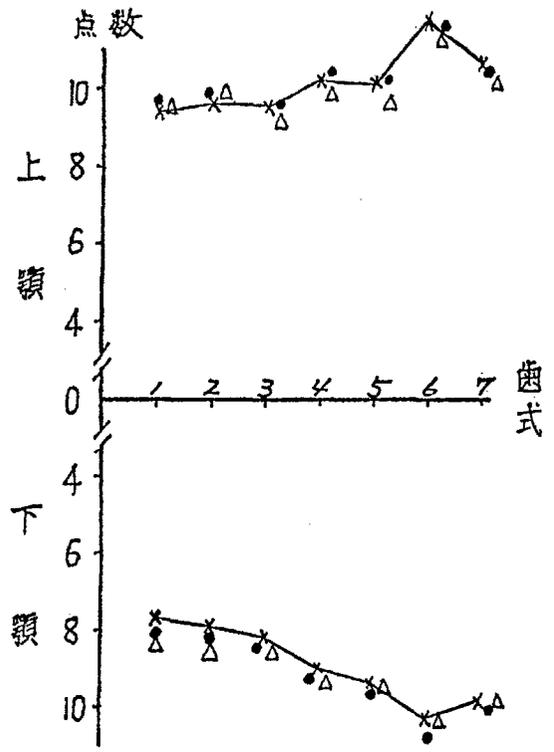


図9 歯牙の形成度(14歳)



4. 油症児の視機能と前眼部症状

一玉の浦地区の保育所，小学校，中学校の一斉検診

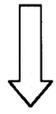
長崎大学眼科学教室

松嶋 嘉文 下田 峰子

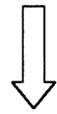
松屋 直樹 三島恵一郎

油症の眼科的症状としては、従来、眼瞼浮腫、瞼結膜色素沈着、マイボーム腺肥大、眼脂過多など前眼部症状が重視され、検診及び認定作業も主にこの項目の有無についてなされてきた。一方、発育成長期におけるこれら前眼部症状の存在が、小児の視機能にいかなる影響を与えるかの検討は、油症児の受診状況や同一地区健康児童との対比ができないことから、これまで充分に行なわれていない。先に我々は、玉の浦小中学生徒の学校検診における裸眼視力検査結果を検討したが、今回、更に進んで同地区の保育所、小学校、中学校の全児童を対象に検診を行ない、健康児、油症認定児（以下患児）患者家族及び届出者（以下未認定児）の3群について視機能及び前眼部症状についての現状把握と比較検討を行なったので報告する。

検診方法



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



<緒言>

我々は、いわゆる油症患者について、歯科学的見地から歯牙および口腔内所見についての追跡調査を続けている。

本年度は、パントモグラフィ-X線撮影装置を使用し、歯牙の形成状態について臨床的観察を行ない、我々が昭和47年度に行なった調査結果との比較検討をし、油症の歯科学的見地からみた経時的変化について検討を加えた。